法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-02

ミステリという器 : 例えば、多島斗志之の場合

ナカツジ, リオ / 中辻, 理夫

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要 / 日本文学誌要
(巻 / Volume)
79
(開始ページ / Start Page)
39
(終了ページ / End Page)
49
(発行年 / Year)
2009-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010175

Hosei University Repository

ミステリという器
―例えば、多島斗志之の場合―

中辻理夫

藤沢周平の人気には揺るぎないものがある。一九九七年の没後も数々の作品が映像化されてきた。それは、作中にまぶされた〈私小説〉と似た味わいの、個としての人生観、感情といったものが多くの読者を強く惹きつけるからなのかもしれない。すなわち、文学として読める要素を内包しているのだ。〈器〉のしっかりした文学作品と言ってもいいだろう。

そもそも小説を文学的に読むとは、どういうことか。人間学として読むことである。それは作家の思想を知識として得る、という態度と重なるところはあるけれどイコールではない。なぜなら、人間を学ぶとは、究極的に言えば、人間とは何かを探究することであり、その対象は必ずしも作家個人を指すものではないからだ。むしろ、架空の登場人物たちが抱く一つ一つの感情を作者はいかなる手法で作中に刻み込んでいるのか、それを味わい、丁寧に鑑賞する態度あってこそ、文学的読みは達成

1

藤沢周平は生前、インタビューに応えて次のように語っている。

〈たとえば私小説みたいに自分を小説の中に入れたりするには、時代小説は格好の器だなあ、というふうに思いましたね。現代小説ではちょっと照れくさくて書けないようなことが、時代小説だと可能なんです〉

このインタビューのタイトルは「なぜ時代小説を書くのか」で、最初『オール讀物』一九九二年十月号〔特集・藤沢周平の世界〕の一部として掲載された。今は『藤沢周平のすべて』（文春文庫）に収められている。

Hosei University Repository

できる。

私たちは皆、感情の奴隷である。毎日、喜怒哀楽に左右され、ときに建設的な、ときにでたらめな行動を取る。感情の中身を自覚できるのは私個人のみだ。ほかの人の脳みそを覗き見ることはできない。

感情を共有することはできないのだ。このれっきとした事実を普段の私たちはあえて忘れることにしているけれども、ふとした拍子に強く思い出すと、恐怖に襲われる。生まれてきたときも、死ぬときも自分は独りだ、と自覚する。孤独にさいなまれる。

なぜ人は小説を読むのか（ひいて言えば映画や演劇を含め、物語芸術に接するのか）と言えば、それは死という宿命、永遠の孤独の到来を、すすんで忘れるためであろう。架空のものであっても、他人の感情、脳みその中と一体化できたというかりそめの錯覚が、自分は独りではない、死ぬときも独りではない、というさらなる錯覚をもたらす。

そして、傑作と駄作とを区別するのは、この感情が正しいプロセスを経て描かれているのか否か、に因るところが大なのである。

安っぽい小説というものがある。例えば、主人公が号泣するけれども、読者はしらけてしまうような作品。それは「こんな出来事があっても人は泣かない」とか「出来事自体が絵空事で、現実にはあり得ない」という思いを読者に抱かせてしまうからなのだ。一方、正しいプロセスを経て人物が泣き、怒り、笑顔を浮かべる小説を読者は愛する。孤独ではなくなった、と満ち足りた気分になる。

小説とは、出来事というストーリー上のプロセスと人物の脳内でうごめく感情とが、時間軸に沿って何度も交互に繰り返し描かれる芸術表現であり、そして文学的に読む読書態度とは、このプロセスと感情とが作中で説得力ある技法で結びついているのか否か、を探る読み方のことを言っている。前述したように、人は感情の奴隷であり、どういうときに人はこのような感情を抱くのか、といったことを真正面から鑑賞することにより、人間とは何か、という根源的な問いに対しいくらかは応じることができると思うのだ。それは同時に、正しいプロセスを踏んで感情を描いている傑作、秀作と、正しくないプロセスを踏んでいる駄作とを選り分ける作業でもある。

この読書態度は、自己内省と想像も伴う。現実の人の生き様と照らし合わせて読むわけだから「自分であれば、こんな出来事ではこのような感情は抱かない」といった自己経験値に対する回想と、「知り合いの多くを見る限り、この感情の高ぶりは納得できる」というような他人の内面に対する類推が必ず伴う。

文学という単語には〝学〟という文字が含まれているくらいだから、アカデミックなイメージが当然、付随し、それは娯楽＝エンターテインメントの対極にあるように感じる人も少なくないだろう。しかしながら冒頭で紹介した通り、藤沢周平の創作意識には、そういう対極イメージを曖昧にしてしまう力が内包されているのだ。ファンの多くは片意地張らずに気楽に、つ

Hosei University Repository

まりは無意識のうちに人間なるものを探究しつつ藤沢作品を読んでいるのではなかろうか。「時代小説というエンターテインメント文芸を楽しんでいる」と表面的に自覚するおかげで深刻な気分に陥らなくて済んでいるけれども、心の根底ではシリアスなものと格闘しているのではないか。

そして、藤沢周平の言は、ミステリというエンターテインメント文芸に対しても示唆してくれるところが大きいように思うのだ。

2

世の中にはミステリ・ファンを自認している人たちが確実にいる。自認していないまでも、ちまたで話題になっているミステリは読むことにしている、という人たちもいる。そして、一切ミステリに興味はないけれど、ほかの種類の小説は読む人たちもいる。このうち三番目の方々にぜひ知っていただきたい。いわゆるミステリ作品でも文学として読めるものが少なくないことを。

ミステリという呼び名一つにしても、抱くイメージは人それぞれであろうが、ここではあえて乱暴に〝謎解きの面白みがある犯罪小説〟としておく。犯罪を取り上げていないミステリは例外とする。

〝謎解き〟の要素に対し拒否感が湧き、ミステリを手に取らない人が第三番目のグループに少なからず含まれているように思うのだ。すなわち、謎解きのプロセスとはクイズ・ゲームであり、それを主眼にした小説を読んでいても、何かしらの学びや感動を得ることはない、と先入観を抱いているのである。

しかし、待って欲しい。謎解きの要素を〈器〉と捉えることができるではないか。器を楽しみつつ〝犯罪小説〟を文学的に読み込むという鑑賞の仕方はいかがであろうか。

そもそも犯罪が生まれる瞬間と、そこに至るまでの背景を小説に描くこと自体、人の感情なるものを強烈になぞっていることなのだ。多くの人は刑務所に入りたくないだろう。法律に抵触して警察に捕まり、有罪判決を受け自由を奪われて生きるのなど真っ平だと、理性では分かっている。しかしながら、その理性をぶち破ってまで罪を犯すときの感情というのは、まことに人の心の秘奥が発露された瞬間ではなかろうか。

物語のほぼ冒頭あたりで殺人事件が起きる。犯人捜しを私立探偵なり刑事なりの主人公が担う。容疑者は複数が浮上し、主人公は物的証拠なり目撃証言なりをもとにして真犯人を絞り込んでいく。これが最も一般的イメージに近いミステリのストーリー・パターンであろう。誰が殺したのか、に加え、犯人はどういう工夫を施して自分の犯行を隠ぺいしようとしたのか、というトリックの謎も含んでいることが多い。

ミステリを読む快楽は、おおむね、謎解きのゲーム性に対し読者の注意を向けさせる作家の技術によってもたらされている。すなわち、この小説は本気で人の心の秘奥に踏み込もうとしていない、片意地を張っていない気楽な物語なのだ、と読者に思い込ませつつ、実は犯罪に向かってしまうときに人が抱く負の

Hosei University Repository

感情へじわじわといざなっていく文芸ジャンルなのである。結末で犯人が判明し、その犯行動機が明らかになったとき、読者は快感を覚えるであろうが、それは他人の感情、すなわち脳みその中と一体化したという錯覚が心地いいからだ。

さらに言えば、被害者側に立ってみて、人が死ぬときの感情を想像することにより、読者は己れの死に対する恐怖を軽減することができる。架空の人物ではあるけれど、他人と究極的な恐怖を共有できたという、これもやはりかりそめの錯覚が孤独を忘れさせてくれる。

謎解きゲームが含有する要素についてもう少し掘り下げて考えてみると、そこには探究すること自体の快楽も含まれているように思われる。人は学習し成長を続ける動物であるが、もしかしたら向学心なるもの（もっと正しく言えば、向学心と呼ぶことができる志向性）が本能に刷り込まれているのかもしれない。ここでまた〝学〟という漢字を登場させたけれども、当然のことながら学問の道とは別に、趣味を極めることも仕事の技術を会得することもまた、向学心を満たすのである。別の言い方を当ててみれば、ある分野の完成形、すなわち真理、真実に到達したいという欲求、と言い換えてもいい。好奇心も一種の向学心であろう。これは分野ではなく、ある現象の真実に辿り着きたい欲求だ。

いずれにせよ探究が気持ちいいのは、向学心を満たすからなのだ。

殺人犯は誰なのか、なぜ殺したのか、どのように殺したのか、といった〝事件という現象の真実〟に辿り着きたい欲求が読者にページをめくらせる。もちろんフィクション内の事件に対する興味だからして、探究の疑似体験をしているわけだけれど、擬似だからこそ気楽なのである。

さらに加えて言っておくと、先の〝犯罪小説〟という形容は当然のことながらかなり大雑把で一面的であることを繰り返し強調しておきたい。国際紛争やマフィア同士の抗争を取り上げているミステリもある。犯罪という概念をもう少し拡げて捉え、攻撃、闘争と言い換えてもいいだろう。いずれにせよ、人の生き死にをダイレクトに取り上げている点では共通している。なので先ほどの定義付けをより噛み砕いて言うと〝疑似体験で探究の快楽を味わえる、生死をダイレクトに取り扱った小説〟となる。

3

本題に入ろう。

多島斗志之の創るミステリは常に上質である。それはまさしく、読者の文学的読みを大いに誘い出すミステリだからだと思うのだ。

この作家は一九四八年、大阪府に生まれた。早稲田大学を卒業後、広告関係の仕事に携わり、一九八二年「あなたは不屈のハンコ・ハンター」で第三十九回小説現代新人賞を受賞する。これは多島健という別名義の作品で、風味はユーモア小説である。多島斗志之の本格始動は一九八五年発表の第一長篇『〈移

Hosei University Repository

情閣〉ゲーム』からだ。直木賞候補になった第六長篇『密約幻書』（一九八九）まで初期はいわゆる国際謀略小説の書き手として知られていた。しかし、しだいに作風の幅を拡げていく。

契機となったのは第七長篇『クリスマス黙示録』（一九九〇）だ。米国ワシントンDCを舞台に日系の女性FBI捜査官とタフな女性警官との死闘を描いたアクション小説である。続く『不思議島』（一九九一）では舞台がガラリと変わって瀬戸内海となり、奥手の女性教師の恋心をしっとりとつづりつつ、彼女が過去に体験した誘拐事件の謎を探っていく。

以後も上質の作品が継続して執筆されていくのだけれど、本稿では文学的読みという力点に符合するよう、特に四作の長篇を取り上げたい。

長篇十一作目『白楼夢（びゃくろうむ）―海峡植民地にて―』（一九九五、現在は創元推理文庫で入手可）の時代設定は大正八（一九一九）年とその翌年である。舞台はイギリスの植民地下にあるシンガポールだ。

物語は主人公・林田が死体を発見するシーンで幕を開ける。彼は休眠状態にあるゴム農園で中国人女性・白蘭（びゃくらん）と会う約束をしていた。ところが園内にある小屋で当の白蘭は胸から血を流して死んでいた。思わず彼女を抱きしめた彼の手も血に染まり、その様を目撃したゴム農園の持ち主が誤解したため、殺人犯の疑いをかけられてしまう。逃亡を余儀なくされた林田には確信があった。罠にハメられた、と。

ここから真犯人捜しのストーリーが始まる。といっても単純な時系列に沿って物語が進むわけではない。本作は二つの叙述パートが交互に現れ、つづられていくのである。一つは「白蘭殺人事件」パート、もう一つは「回顧」パートだ。

そもそも物語冒頭にはいくつかの謎がちりばめられている。林田とは、白蘭とはいかなる人物なのか。なぜ二人は人けのない農園の小屋で会おうとしたのか。そして、なぜ林田は罠にハメられたと確信したのか。犯人は誰か、というただ一個の謎のみではないのである。二つのパートが交互に書き分けられることによって、これらがしだいしだいに判明していく。読者のもっぱらの興味はこのプロセスに向かうはずだ。

「回顧」パートは、すなわち林田が逃亡を続けながら過去を振り返っている、その内面を描いているわけだけれど、そう昔から思い返してはいない。一年半前、日本からシンガポールに初めてやって来たときがスタートで、この地点が大正八年なのである。

林田は三十代前半、出版社勤務を辞し心機一転、特に具体的な計画があるわけではないが、何か大きな仕事に打ち込みたくシンガポールへやって来た。かつて日本の大学で一緒だった呂（りょ）鳳生（ほうせい）の家を訪ねる。

シンガポールでは華僑の形成する社会が大きな力を持っていた。出身地別にグループ＝幇（パン）に分かれており、それぞれお互いが商売敵なのだった。そのうち最大勢力が福建幇であり、第二勢力が潮州幇である。そして鳳生の父親は潮州幇のトップに立っているものの病床にある。鳳生が次代を担うのは明らかであった。

Hosei University Repository

この「回顧」パートは一種の立身出世物語でもある。華僑の有力者と友人であるというだけで、林田自身も何かしら才覚のある者としてシンガポール経済の中心に立つ人たちから一目置かれるようになる。

彼はまず日本人社会に受け入れられる。華僑のみならず日本人もまた相当数、三千人以上がシンガポールに住んでおり、彼らは彼らで社会を形成していた。ゴム農園のビジネスで対立し合っている者たちの仲裁役となり、名を上げるのだった。

林田のキャラクターに独特の面白みがある。彼は何の計画も立てずふらりと日本から外国へ渡ってくるくらいだから、大胆であるのは間違いない。しかしながら、というか、だからこそ呑気なところもあり、彼は周囲から請われるままいくつもの仲裁役を担い続け、さらに尊敬を集める。いわば受身的であり、その場その場の状況に合わせているうち、なぜか大物扱いされるようになる。こういう振る舞いが「回顧」パート全体の読み応え、いわば物語の膨らみにつながっている。

このパートには活劇シーンもいくつか含まれている。それはマフィア映画の抗争を彷彿させるのだった。多島斗志之は歴史探究とミステリの興趣を融合させる手腕では定評があり、本作執筆においても当時のシンガポールについて徹底的に調べ上げ、様々な人種がひしめき合うエキゾチックな香り、熱気を充満させた。と同時にエンターテインメント性、フィクション特有の派手さ、荒唐無稽さの保持も忘れていない。それは対立する者たちの人物造形にかなりの荒っぽさ、つまりはマフィアめいた要素を加えることで生み出されているのだ。

ゴム農園経営をする日本人の一人は遊女屋が本業であり、そこに武闘派的な強引な振る舞いで勢力を伸ばしている中国人グループが関わってくるという設定のおかげで、銃撃などの激しい活劇シーンが極めて自然に感じられる。裏社会の抗争を描いた香港映画と日本の任侠映画を混ぜ合わせたような興奮があるのだ。

先にも述べた通り林田には受身的なところがあり、ゆえに抗争に対しても傍観者の気分である。抗争の当事者たちは感情を爆発させ、それは確かに読みどころであるのだけれど、一方で林田の醒めた、どこか抗争に対して哀れむようなたたずまいも魅力的だ。作品の随所に静謐な空気が流れる。

激しさと静けさの並立がこの「回顧」パートに確固たる文学性を与えている。林田の視座があるからこそ、読者もまた活劇シーンにのめり込み過ぎずに抗争を客観視できる。大正時代のシンガポールでおそらくは実際に行なわれていたであろうビジネス対立、感情のぶつかり合いを歴史の一断面として捉えたような喜び、大河小説に接するのに近い重厚な気分を味わえるのだ。

歴史のひもときとは、自分のアイデンティティを再認識することでもある。すなわち歴史の積み重ねの中に自分もいるという実感が、人生の方向性を見つめ直す機会を与えてくれるのだ。それは孤独感からの解放にもつながる。過去、歴史があった。人々は連綿と歴史を築き続け、その大河の流れから自分という存在も生み出された。そして自分の死後、そのあとを継ぐ者が

Hosei University Repository

出てくるだろう。私は独りではない、時間軸の中で確実にほかの人々とつながっている、つまり無意味な存在ではないのだという実感によって、安堵がもたらされる。

単一の英国史や日本史を描くのではなく、ある時期のシンガポールを活写し、多国籍の歴史の重みを感じさせてくれるところが本作の大きな魅力であろう。「回顧」パートはいわば普通小説に近い面白みがある。一方で「白蘭殺人事件」パートは、林田が歴史の荒波に巻き込まれているパートだ。受身であるがゆえに成功した者が、やはり受身であるせいで歴史に仕返しされた。サスペンス小説としてのスリルが歴史の重みと結合し、こちらのパートにも犯人捜しの興趣プラスα、感情の説得力とでも言うべきものが付加されているのだった。

4

十四作目の長篇『症例A』（二〇〇〇、角川文庫）は多重人格を取り上げている作品だ。とはいっても猟奇的なサイコ・サスペンスではない。多重人格とは一般的な通称のようなもので、精神医学の世界では解離性同一性障害が正しい名称である。この病気について知るために作者は大量の専門的文献を読みあさり、まさしく医師が患者を治療する過程でしだいしだいに心の秘奥へ近づいていく様を、粘り強い筆致で描いている。瞬発的な派手さはないが、確実に大きなうねりをもって読者を引き込んでいくのだ。

離婚歴のある三十四歳の精神科医・榊は東京近郊の病院を辞職し、辺鄙な土地にあるS精神科病院にやって来たばかりだ。常勤医募集を知って訪れ、再就職したのだ。前任の沢村医師はつい先ごろ亡くなっている。二十人余りの入院患者を榊が引き継いだ。

そのうちの一人に十七歳の女子高生がいた。亜左美という名前は仮名である。身内の希望などで本名を隠し精神科に入院する例はたまにある。彼女の本名は院長と事務長だけが知っている。

当初の榊は、感情の起伏が激しい、虚言癖がある等の症状を持つ亜左美を分裂病と捉えていた。やがて、境界例という別の疾患概念を当てはめていくが、そこにまた別の診断を進言してくる者がいた。臨床心理士・広瀬由起だ。彼女はＤＩＤ―解離性同一性障害だというのだ。

一体、亜左美の病名は何なのか。精神科医としての知識を最大限に駆使し、真摯に探究を続けていく榊の姿勢が実にダイナミックだ。肉体の動きがダイナミック、というのではない。自身の過去も振り返り、追いつめられ、苦悩しつつ精神の力を総動員し亜左美の内面に入り込んでいくプロセスから、強烈なエネルギーが放散されるのである。

本作も推理小説としての定型パターンを踏まえている。前任の沢村医師の死を巡る謎が、物語のかなり早めの段階で読者の興味を引くはずだ。漠然と事故死とされているだけで、具体的にはどのような死因だったのかは分からない。もしかしたら殺人なのかもしれない。加えて榊の離婚や前の病院を辞職した事情も、しばらくは伏せられている。

Hosei University Repository

前任医師の死、榊の過去、亜左美の本当の病名、これらに関する謎が複合的に混じり合いつつ徐々に明らかになってくるからこそ、本作の探究プロセスは大きなうねりを持つのだった。それのみではない。本作も『白楼夢』同様、別のパートが入り込んでくるのだ。とはいっても、それは榊の回想ではない。東京の国立博物館に勤める学芸員・江馬遥子の探究パートである。

重要文化財に指定されている収蔵品の狛犬が実は贋作ではないかという疑いが浮上した。昔、遥子の父親も同じ博物館に勤務していたことがあり、そのときの同僚、五十嵐が事情を知っているようだ。遥子は彼の消息を捜し始める。狛犬は平安時代の作とされており、それが本物か偽物か探る道のりは、そのまま歴史探究の道である。そして本作もまた、最初は交互に別個に現われつづられていく二つのパートがしだいに接点を持ち始める。まさしく歴史の重みが含有するスケール感が、個人の心と融合していくのだ。

先にも述べた通り、歴史と自身を重ねあわせる感覚は、人の孤独の心を慰める。加えて本作は榊が自身の過去＝心の傷を見つめながら、亜左美、そして広瀬由起の心を探っていく物語である。ぎりぎりまで深い、個と個とのコミュニケーションを描いている。

よく使われる言葉ではあるけれど、疎外感が孤独の源である。人と人とは決して分かり合えないという感覚だ。それを越えて分かり合おうとする意志が本作にはみなぎっている。まさしく他人の心を見つめ、触れようとするストーリーなのだから。

読み進めていくうちに読者は、解離性同一性障害についての知識を学んでいくだろうが、同時にまた、いわゆる人間の多面性というものに対しても注意が向かうはずだ。もちろん、本作では正しく専門的な知識が盛り込まれており、疾患と万人共通の性質とを明確に区別している。ではあるのだけれど、やはり本作においてこの疾患はあらゆる人間の持つ多面性を象徴しているのだ。それが小説というものだ。複雑で分からないからこそ、お互いに分かり合おうとする、そして孤独から解き放たれることを痛切に願う、それは人間が生まれながらに持つ習性なのである。

5

振り返ってみれば多島斗志之は第一長篇『〈移情閣〉ゲーム』（講談社ノベルス）のときから歴史探究の姿勢が発散するスケール感と個人の繊細な感情とを、メリハリ良く対比させ融合させるのが巧みな作家なのだった。

物語は本作が刊行された頃、一九八〇年代に設定されているのだけれど、シンガポールから日本にやって来た華僑実業家が重要な役割を務めるところにも『白楼夢』との親和性、共鳴性のようなものが感じられる。この華僑、劉偉南が広告代理店『宣通』に大規模なイベント・キャンペーンを依頼する。彼の構想は神戸の移情閣で中国の鄧小平と台湾の蒋経国とを握手させるというものだった。二人とも各々の国の最高位に立っている。

Hosei University Repository

劉の目的はビジネス上のメリットだ。彼は中国大陸ではなく台湾出身、シンガポール国籍である。所属する在外華僑団体の役員会で和解イベントの企画が立ち上がったという。中国が英米国との接近を進めている時勢において、台湾と関係の深い華僑たちは微妙な立場にある。大陸で大きな顔をして商売することはできない。中台和解が成立すれば彼らもまた時勢に乗じ、儲けにあずかれるという算段である。

イベントを成功させるのに重要なシンボルが孫文だという。大陸でも台湾でも大いに尊敬、敬慕されており、両者の接点になり得るのだ。そして移情閣は彼が来日したとき、歓迎会が催された、ゆかりの場所なのだった。

主人公は宣通の企画部長・塔原玄三。彼を中心にして一大広告キャンペーンが進められていくプロセスは読みどころの一つであるが、作者の主眼ではない。ストーリーが進むに連れ、まさしく国際謀略小説の様相を呈してくるのである。

文学的読みを誘い出すエピソードを挙げよう。本作で歴史探究の役を担うのが笠井という元大学の助教授だ。彼はなぜか宣通がキャンペーン企画を固めている最中、移情閣に侵入し床下を掘って警察に逮捕される。掘った理由については黙秘を貫いたが、微罪のため釈放された。塔原には気に入らない。キャンペーンにマイナス・イメージを与える要因は取り除かねばならない。彼は外注のプロダクションに勤める男・紺野に、笠井とはどういう人物なのか調べて来いと命じる。

笠井は助教授時代、ある仮説を立て論文を発表する目標を持っていた。孫文がロンドンへ渡った際、清国公使館に誘拐監禁された、いわゆるロンドン事件に関するものだ。紺野は笠井と対面し、仮説を聞いているうちに引き込まれていく。かつ笠井の現在の境遇に同情する。論文がきっかけで彼は陰謀にからめとられ、大学を辞職せざるを得なくなったのだという。歴史上の人物を媒介にし、笠井という個に対し紺野という個の感情が交わろうとする瞬間である。

こういう箇所を大切にして読みたいものだ。決して枝葉末節ではない。ストーリー運びの派手さに引っ張られ、つい読み落としそうになるけれど、感情を解き放つ瞬間瞬間の積み重ねこそ、実は読者の興趣を刺激していく最高の文芸技法であり、その技法は多島斗志之の得意技なのである。

技が最も発揮された作品を紹介したい。長篇十七作目『感傷コンパス』（二〇〇七、角川書店）である。ミステリではない。だから、より強く発揮されたとも言える。

長篇とはいっても全七章各々に独立性が感じられ、連作短篇集に似た構成である。主人公は山里の小さな分校の教師・井上明子だ。

物語は明子が故郷を離れ、汽車で伊賀の柘植（つげ）駅へ向かっているところから始まる。時代設定は昭和三十（一九五五）年である。

贅肉のような描写や説明を極力排し、研ぎ澄まされた文のつづりが本作の真髄である。冒頭の数ページで明子がいかなる過去を持っている女性か簡潔に語られる。実父と継母、そのあいだにできた子供たちと生活していて、日々、居心地の悪さを感

Hosei University Repository

じていた。明子だけが亡くなった前妻の子なのだった。実家から離れて暮らすため、そこから遠い三重県で教員採用試験を受け合格し、今、初めての任地へ向かっているのだ。

とはいっても、しがらみからの解放感に満たされているわけではない。不安だらけである。志摩半島の海岸美にあこがれ三重県を選んで試験を受けたのに、それとは対極にある場所へ配属されてしまった。不安を和らげてくれるのが、父からの贈り物である方位磁針（コンパス）だ。「迷子にならんようにな」と冗談めいた口調で言いながら、父が手渡してくれた。

〈迷子〉は本作のキーワードである。人生そのもの、日々を生きていくなかでの混迷を指して使われている。そして方位磁針は、混迷を是正していくための知恵、意志の力といったものを象徴しているのだ。

表面的なタッチだけをなぞって読めば、本作は心温まる物語である。明子が担任になったクラスは小学五年生が四人、四年生が二人。そのうち一人を除いて皆が素直で、明子を慕う。穏やかな触れ合いがある。

しかしながら重要なのは表面ではなく、その裏側なのだ。素直ではない五年生の娘・巴田朱根の存在こそ物語を動かす原動力である。彼女はいつも遅刻し、二時間目から出席する。なぜかは分からない。乱暴で、ほかの子供と悶着を起こすことは珍しくない。問題児である。

そして素直な子たちにしても、問題と全く無縁というわけではない。小坂豊・保の兄弟は東京から一時的に来ている。母親が入院しており、その病が癒えるまで祖母の家に預けられているのだ。しかし、いつ癒えるかはっきりと分かるものではない。四年生の辻山房代は内気なはにかみ屋だが、服は薄汚れており、家庭の暗さを感じさせる。

加えて、明子の周辺にいる大人たちもわけありの風情である。低学年を受け持っている井上千津世（明子と同じ苗字だ）は表情が乏しく、覇気のない調子で日々の授業をこなしている。営林署で働く男・空木（うつぎ）はぶっきらぼうで、明子に対し親切のようでありつつも、懇意になることを避け、わざと無愛想にしているようだ。独自に猪の研究をしているのも妙である。

本作はミステリではないけれど、ミステリ的手法は使っていて（というか小説というものがそもそもそういう手法と無縁ではないのだが）、朱根が問題児である理由を中心に、ほかの人物たちの陰の部分や過去など、いくつかの曖昧な謎、それらが解き明かされていくプロセスが読者の興味を引き込んでいく。

しかし、繰り返すようだが、こういう手法はあくまで手法であって、作品の本質ではない。

赤子の誕生とは、いわば人生における混迷が始まる瞬間である。山里が舞台の本作ではしばしば森林地帯の風景が描写される。これは当然ながらうっかりしていると〈迷子〉になってしまう、人生なるものを象徴しているのだ。

明子自身が、迷いを抱えている。千津世や空木のしだいに明らかになってくる過去は、万人に共通する混迷を彷彿させるのだけれど、二人が明子より年上であることに留意されたい。何歳になろうと人は苦悩から解放されることはない。そういう真

Hosei University Repository

理がまだ若い明子を不安にさせる。千津世と明子とを作者が同じ苗字にした意味を感じ取って欲しい。千津世は将来の明子の姿かもしれない。あるいはそうではないかもしれない。いずれにせよ、明子と無縁ではない存在だ。人は悩める生き物であるという逃れられない事実を明子に知らしめる。そういう明子が、混迷というか混迷の可能性を秘めた子供たちと、自身も迷いつつ、触れ合う。

作中、標準語を使っている明子が土地の方言を理解しようと努める様が何度か（しかし、さりげなく）描かれる。いわば方言は人と人とのあいだに立ちふさがる遮蔽物であり、彼女はそれを受け入れたりかいくぐったりしつつ、子供や土地の住民たちとの距離を縮めようとする。これもやはり、孤独からの解放を目指した営みであろう。

作品全体の、ときにユーモアも混じる穏やかな水彩画のようなタッチはもちろん魅力的である。川のせせらぎ、野鳥の鳴き声、夏祭りのにぎわい、といった描写で心和まない読者はいないだろう。しかし、そうしたつましやかな表面の端々に、暗い混迷が見え隠れするのだ。

先に、贅肉を極力排した文つづりが真髄であると述べた理由がこれであって、行間を読ませる圧倒的な筆力がある。

小説家は、様々な登場人物を使って複数の感情を表現する。それはすなわち、万人の感情を描いているということだ。そして読者は、作品を介して世界中の万人とコミュニケーションしているのだ。

『感傷コンパス』は、日々の営み、という細やかな外形を構築したうえで、人類すべてが脳内で抱えている混迷、孤独から逃れたいがために生じる混迷を描いている。一九五五年という時代を活写するために作者は当時の人たちが慣れ親しんだ唱歌や歌謡曲をしばしば登場させ、臨場感を高めているのだけれど、これもまた時間軸の中に自分がいる実感を読者に与えてくれる。

確固たるストーリー性を持っているのに、それを巧みに地味目に押さえ、むしろ感情の一つ一つを刻み込み、それを行間から浮かび上がらせ、読者の鑑賞をうながしている。瞬間、空気を体感させるような、雰囲気に浸らせるような書き方をしている。

おそらく行間を読み込まなくとも、本作は楽しむことができるだろう。しかし、それはもったいない読み方だ。読書の喜びをかなり放棄している。行間を読むとは、つまり、シーンに盛り込まれている複数の情報を積極的に想像する読み方であり、とりわけ感情に留意して読んだとき、これが文学的読みとなるのである。本作を読んだあと改めてほかのミステリ作品に立ち返って読み直したとき、多島斗志之の豊饒な才能を再認識できるに違いない。

（なかつじ　りお・文芸評論家）